

昔の幼稚園の想い出

倉 田 ミ 子

お茶の水幼稚園創設九十周年にあたって「幼児の教育」誌上に昔の想い出を書くようにとのお便りをいただき、非才の身もかえりみず、おぼろげながらも記憶をたどって綴ってみることにしました。

風雪六十年といっても、私には、大正十五年の幼稚園令発布もついでこの間のような感じがしてなりません。幼稚園の変遷を振り返って見た時、教育の内容面、経営面でも数々の人のこと、物のこと、あるいは社会の出来事など時勢の流れにそって、幼稚園のあり方も、その折々が走馬燈のように想い浮びます。

昔、山口には、二つの小学校附属幼稚園がありました。都合で廃園となったので、時の小学校長が明治三十七年、今から六十二年前に亀山公園の麓に知事の認可をうけ創始されたのが、私の幼稚園のそもそもの始まりであります。もう一つは町の北部に外人経営のミッション幼稚園があって、明治二十九年頃の創設と聞いております。当時、いずれも四十名位の園児を収容しておりま

した。

規定園児数 園の幼児数は、幼稚園令施行規定により、百二十人以下とされ、特別の事情のある場合のみ二百人まで許可されておりました。保母一人の保育する幼児数は約四十人以下とされ、園児は、一年、二年または、三年保育が混合になっていました。

恩物 恩物は、折紙、お絵かき、組織、豆細工、縫取り、遊戯、唱歌、粘土細工などフレールベル恩物やモンテッソーリ教具などで感覚教育が行なわれ、その内容は、視、聴、味、触、嗅覚の練習や色彩教育資料もあっておもしろく遊んだ時代もありました。が、製作品は、大人の模倣が大部分で高度の模様を組立て、細かい神経をつかって、指先の技術の習練を主とした扱いであったように思います。

材料は、現在も同じ物を使用していますが、取り扱いやその目的表現の方法などは、大変な相違のあることは申すまでもありません。また、色板をならべて模様をつくったり、積木遊びに便利

なように黒塗りの机の面に、二・五cm四方の方眼線が基盤の目のように彫りこまれた町立時代からの園児用机が今なお少数残っておりあります。

園児の服装 明治末期から大正にかけての園児の服装は、まぢまぢで和洋両方あって、男子は、背広または羽織袴を着し見るからに小公子然としており、女子は、祝祭日の式には、大人同様黒紋付にエビ茶の袴またはドレスにボンネット、ふだんも袴をつけていた子どももあり、絵でみる鹿鳴館時代の名残りといった感がありました。何れも整った身なりをしていて、中流以上の家庭で恵まれた環境の中に育ち、父兄もその姿に憧れてほこりを感じておられたように思います。

先生の資格 小学校正教員の免許状所持者かまたは女学校卒業者が認可幼稚園で一年間実習につけば無試験検定がうけられ、また検定試験をうけて免許をとる法もありました。保母養成機関のない時代には、最も近道である無試験検定希望者を代用保母制限外の顔をして、一年間みっちり勉強させて本採用に引きあげ、職員組織も規定通り編成することができました。

保育運営面での想い出の行事

1 臨海保育 昭和四年頃から戦前まで、毎年夏季休暇の一日を親子連れ海遊びを計画し、山の子によい経験の場をつくっておりました。今日のようにバスの便もない時代でもあり、学校の計画

にもなかったので家族連れで参加し、お互いが心から楽しみ合う年中行事となっていました。一行には、看護婦、写真師など引率も多方面の方々が加わられ楽しい想い出の行事でした。

2 茶話会 今のように給食のない時代は、月数回、全園児を集めて茶話会を開き、特に種まきから収穫まで、鉢植えのソラ豆について観察させ、最後にその豆で豆飯をたいて全園児によるだんらんの場合をつくったり、また十二月二十三日は皇太子初のお誕生の年から引続き今日まで毎年赤飯をたいてお祝いをするにしています。今では裕宮様のお誕生日もお祝いしたいと考えております。

その他、自作のカボチャや大豆や花垣の一隅にできた餅米で餅をつき、アラレにして節分に豆まきをしたり、会食したり園児も先生も心に通いあう楽しさを味わっています。三十幾年もよくつづいたものだと不思議な位であります。

3 凧あげ 全園児自作の凧を持って、はだ寒い広場で凧あげ会を催していましたが、現在のように家が建てこんで子どもの遊ぶ広場もだんだん狭められてきたのに引きかえ、昔は右も左も安全交通でのびのびと百余の凧が、青空に群り飛ぶ光景は、今でも懐かしく真に壮快な遊びでありました。

4 白衣勇士の慰問招待 昭和十八、九年頃は運動会や雛祭遊戯会などには白衣の勇士を招待したり、病院へ慰問に出かけたり当時の国情を反映して、幼き者にも心うたれる何ものがあつたこ

ことと思います。

戦争犠牲者 永い間、幼児教育に携ってきた中で人とのつながりにおいて、最も悲しい想い出は何といっても園育ちの戦争犠牲者のことです。前途ある優秀な青年となって、あるいは特攻隊員として、あるいは動員学徒として、陸に、海に散華してゆかれた勇士のことであります。今もありありと、あの子、この子と幼な顔や在園当時の想い出など想い浮べて痛ましが胸の底からついててきます。

若葉会 昭和七年頃、有志がたびたび集まって熱心に子どもの日常の問題について話し合う場がもたれるようになり、次第にお母さんと先生との間に親しみの度が深められ、さらに盛り上って、運動会や雛祭りなどにはバザーが開かれるようになり、その純益で有益な講演会や親睦のための旅行などが計画され、その活動はめざましいものがありました。

今の当園の若葉会（P・T・A）結成もこの会が素地をつくりあげたものです。当時の園児たちは、今は三十七、八才の立派な社会人として、組織の中堅として各地に散在活躍しておられます。

若葉会創設当時の最高幹部の方々が十八名位おられ、今もなお親交厚く時々会合してお互いが往年を語り合い孫自慢の語り場となって生き甲斐を感じる仲間同士となっております。ちなみに、親・子・孫三代、またはご一族十人目の在園児のあることも珍しくありません。

保育料等 大正末期まで保育料、入園料ともに一円でしたが昭和

の初めから一月五十銭から二円となり、今から考えますと今昔うたた感慨ひとしお深いものがあります。ちなみに昭和七年関西地方、昭和十四年に九州地方を視察した折の保育料をぬき書きしてみましよう。

官奈良二円市大阪三円市神戸三円市御影一、五円(県)明石一円(私)宇治山田一円(公)小倉一円(公)熊本四、七円(私)福岡一、五円(私)佐賀一円
大正末期から昭和にかけて官公庁の視学の私立幼稚園に対する眼は冷たかったように思う。その一例として幼稚園は何をしておるだろうという声が監督官の中からもれ、地域社会からも子守団様にみられ託児所と間違えられる一面もあってこのみじめな存在を如何にして好転させるべきかに苦心しました。

昭和十四年九月には、視学委員視察指導研究会が設置され徐々に軌道に乗せられてきたが、公立は、昔も今もお役所の教育系列にあつて幅広い場を展開しつつあるのに比べ、私幼に対しての眼は真に冷たい、机上の管理は甚だきびしいが教育内容の指導には全く権限外といった組立てらしい。

現在では私幼の数は百四十園の大世帯となり、ますます私学振興の重要性がとねられる折柄私幼の展開に役立つよう、その筋に対し単なる管理のほかに直接教育内容を充実し得る現場指導その他適切な機構を打ち立てていただけるよう望んで止みません。